

# 小説

井上 次雄  
杉山 啓志  
選

入選

## 桐の箱

米原 市  
ほりた 碧 伊

自由になったことは気の毒だが、その人なりに出来る仕事はあるだろう。あれではまるで乞食だと陰口を言った。傷痍軍人って乞食やと言いつける友だちもいて、秋子は胸が苦しくなった。

秋子の父、久男は二十四歳の時に志那事変に出征し、極寒の中国で負傷した。

「秋ちゃんのお父さん、なんで手ががないん？」

友だちがよく聞いた。

「戦争で怪我しやあったん」

秋子は何の躊躇もなく答えた。しかし、傷痍軍人という言葉は知っていても使わなかった。

久男は仕事には恵まれなかった。貧しい農家の三男坊として生まれ、学校を出るとすぐに大阪の町工場に働きに出た。職人としてコツコツと金物を作り続けていたが、戦争で利き手の右手を肘より上を切断したため、元の仕事に戻れるはずもなく、仕事が合わず、

転々とした。

母のよしゑもまた貧しい農家の五女であった。子どもの頃から成績は優秀だったが、女に学問はいらんと言われ、十分な教育も受けさせられることもなく、地場産業のちりめん工場に織子として働きに出た。七歳上の姉が東京の社会教育家の情報を教えてくれたので、毎月冊子を送ってもらった。同僚が歌手などに夢中になる寮生活の中で一人ひたすら勉強した。全国の人とも文通で交流し、学校を出ていなくても人間性を高めることが出来るかと教えられた。二十代の半ばになると人の勧めもあり、公務員試験を受けて合格して、技術吏員となった。

久男とよしゑが結婚したときには一間の借家であった。久男は地場産業のビロードの針切りを内職のようにしていたことがあった。ビロードは毛羽立たせるために針金を一緒に織り込まれるが、針金を取り出すために織り込んだ輪奈の先をナイフで切っていく作業がある。シャーという音がする。幼い秋子が這って久男のそばに来たので、邪魔にはなるがあぐらをかいた膝に乗せて作業を続けていると、子猫のように丸まって眠ってしまった。その様子があまりに可愛くて忘れられないと、久男は何度もよしゑに話したという。

よしゑは何としても働き続けなければなら

昭和三十年代も半ばになると川口秋子は小学生になった。終戦から十年以上も経つと秋子の住む田舎の町にも活気が戻ってきた。有名な戦国武将の城があったという公園には桜が満開となつて、花見客で賑わっていた。そんな場所には傷痍軍人と呼ばれる人が二人一組になつて立っていた。戦争で負傷した人達だ。日本軍の帽子をかぶり、軍病院の病衣を着て、アコーデイオンを弾きながら軍歌を歌っていた。左腕の上部には赤十字のマークがあった。前には蓋の開いた飯ごうが置かれていた。

人々は目をそらして通り過ぎた。身体が不

なかった。当時の市内には零歳児を受け入れる保育所などなかった。両方の母親に頼ることも出来ず、そのため職場の近くに個人的にお金を払い、預かってくれるところを探した。何軒も断られたが、商店街から路地を入った小さな自転車修理の店、武田輪店の主人が引き受けてくれた。三人の娘を育てた気の弱い、おとなしい妻が引き受けてくれたのだ。秋子を預かることで得られるわずかな金は、貧しく、慎ましく生きている生活の足しになった。秋子はおっちゃん、おばちゃんと呼んで可愛がってもらった。混乱したのは三人の娘である。突然現れた赤ん坊を母親が神経をとがらせて、世話をするようになったのだ。

娘達から理不尽にも怒鳴りつけられることも多かったし、秋子がいち早く覚えた言葉は「いんで」という言葉だった。古語が残るこの地方の方言で、「帰って」という意味だった。

父親が大黒柱となつて家を支え、学校から帰ると白い割烹着を着た母親が迎えてくれる。そんな友だちの家を想像して憧れたが現実とは違った。母の自転車で乗せてもらい、帰る途中、「お母さんと一緒に幸せね」と声を掛けた人がいた。その時、秋子は「私は幸せではない」と小さな声で呟いた。よしゑが突

然怒り出した。よしゑにしてみれば夫と子どものために自分を犠牲に生きているのに耐えられない娘の言葉だった。秋子はこれは怒られることなんだろうかと思つたが、小さいときから黙つて我慢することには慣れていて、その後、秋子が小学三年生になつたばかりの頃、武田のおばちゃんが突然に亡くなつた。生まれてから九年近く過ごしてきた生活が一変した。

自宅は学区を二区も超えたところであつたが、よしゑは秋子を転校させるつもりは全くなかつた。職場が学校に近いのとはにかく便利だつたのだ。年端も行かない頃から厳しい寮生活で過ごした自分の成育歴と比べても、酷なことではなかつた。秋子は学校が終わるとよしゑの職場の隅に隠した小さな自転車で自宅まで帰つた。同級生の男子に見つかったときには、「学校に自転車であたらあかんやろ、先生に言うぞ」と言われた。秋子は普段、学校でははつきりものを言うタイプではあつたが、自分も納得していない違反のよいうなことには反論の余地はなかつた。担任の先生からは転校しろと叱られた。秋子は私にはなく、親に言つてほしいと思つたが、黙つていた。卒業までそんな生活が続いた。秋子が一人で自宅に帰るようになってから、学校が違うので近所に友だちもなく寂し

いだろうと久男はテレビを購入した。近所と比べると大分遅かつたが、秋子は学校から帰つた頃に外国の映画が放送されるのを楽しみに見た。何度も同じものが繰り返し放送されたし、大人の内容だつたが、秋子は感動した。

特に好きだつたのが『心の旅路』という古い映画で、戦争で心が傷ついた兵士が記憶喪失になつて病院に入院していたが、妻がほんとうに思い出せるまで尽くすという繊細で美しい映画だつた。飽きることなく何度も見た。何より驚いたのは、アメリカには戦争で心が傷ついた兵士のための病院があることだつた。

久男が帰つてくるとテレビのチャンネル権は完全に久男のものとなつた。相撲、落語、プロレスなどで、秋子はあまり見なかつたが、アメリカのテレビドラマが掛かつたときは久男と一緒に見た。その中で『コンバット！』という戦争のドラマだけは久男は絶対にかけさせなかつた。同級生の男子が面白そうに話しているのを聞いたことがあつた。秋子は戦争に負けたアメリカ軍の兵士が、格好良く描かれていることに久男は耐えられなかつたのではないかと理解していた。ところが違つた。久男はあんな風に上官と部下が親しく話しているのは見ていられないと言つたの

だ。そういえば日本のドラマや映画では軍隊の上下関係ははつきりしていて、厳しく、いじめとすら取れるような仕打ちに、気の弱い若い兵士が苦悩する場面をよく見た。葉莖やまつぶの数が合わない叱責され、身体を休めるはずの夜中に狂ったように探していた場面では胸が張り裂けそうになった。

久男は戦争の話が秋子にすることはほとんどなかった。怪我をして野戦病院に運ばれて肘から上のところで腕を切断されたときはものすごく痛かった。利き手をなくしたのだから、左手で字が書けるようになるために国語の辞書を書き写したと話した程度であった。

久男は明るく、よく動く人だったので、秋子は久男の不自由ささえ気づかなかったほどであった。どこへ行くにも自転車を持ちこなし、急な雨が降ってきたら、傘を貸してやるうと言ってくれる人がいたが、片手では使えんからなあど濡れて帰ってきた。

夏休みのある日、秋子は昼寝をしていたが、そばで久男が友ともたちと話していた。

「もうあかんと思おもたことは何遍もあつたで。娘がいたから生きてこれたんや」

昼寝から目覚めた秋子はそばで聞いて、自分は父に愛されていると実感した。しかし、小学生の秋子には久男がもうあかんと思つたことは何かが気にならなかつた。

久男には同じ障害を持つ傷痍軍人の仲間がいたが、親から受け継いだ家や田畑もあり、学校の教師であつたり、公務員であつたりして特に生活に困窮する人たちではなかつた。久男は彼らが年を取ると地位も上がつて偉そうな態度だとひがんだ愚痴を言うこともあつた。その後、必ず「こうは言うてもあいつらとしか分かり合えんこともあるでな」と言つた。

久男とよしゑはコツコツと貯金をして五十歳を過ぎて、久男の生まれ故郷に家を建てた。念願の持ち家だつた。

家をきれいに整え、庭の手入れも行き届き、久男の自慢だつたが、徐々に久男の様子に変化が現れた。秋子の老人福祉に携わる友人がお父さんを病院に連れて行った方が良くよと言つたのだ。認知症状が感じられるというのだ。その矢先、よしゑが目を離れた隙に久男は自転車を出かけて転倒し、大腿骨の骨頭を骨折した。

急遽入院となつて秋子は仕事を終えた夜に付き添ふことにした。久男は突然天井を指さし、「あんなどころにラツパがある。帽子もや」と言いだした。せん妄もんもうがでたのだ。一過性のものだと判断し聞いていた。するとのぞき込んだ秋子の顔を見て、「こんなに蜘蛛の巣が着いているやないか」と頬や顎を拭いて

くれる。何にも話さなかつた戦争の場面が何かをきっかけにしてやはりすぐに出てくるのだ。秋子は辛い体験を抑圧して耐えてきた久男を哀れに思つた。

久男は高齢になつて大けがをしたが、寝たきりにならず、家庭で介護が可能になつた。認知症は進行し、溺愛する秋子の名前も忘れ

た。久男は元氣なときには傷痍軍人会や身体障害者の会など役員をして頑張つてきたが、思つたことを口にする性格から友だちも多いが、敵も多かつた。よしゑは父ちゃんはその性格やから私が苦労すると時々秋子に愚痴を言つた。友だちと商売を始めようとするが、失敗もあつた。よしゑにとつて三十歳を過ぎて生まれた一人つ子の秋子はまさに分身であつた。秋子は子どもの頃から母の愚痴を聞き、大人であることを要求されてきたのだ。

認知症状からか、穏やかな表情になつた久男が秋子に話し出した。

「入隊してきた戦友がな、上官に隠れて胸のポケットから女の人の写真を一枚出してな、『可愛いやろ、可愛いやろ』言うて見せたんや。前の日に結婚式を挙げてきたんやて」

写真を見せる仕事まで真似して、あまりに愛おしそうに言うので、その人は今どうして

おられるのかと秋子は尋ねた。

「戦死した」

ひとこと辛そうに即答したので、それ以上聞く気にはなれなかった。

久男の七回忌を済ませた頃、秋子はよしゑの介護のために、長年勤めた仕事を辞め、よしゑと向き合う時間も増えた。

秋子はよしゑに久男が負傷したときの話を聞いた。

「伝令やつたんよ」

よしゑは自分のことのようにきつぱりと言った。危険なところを突破して味方に情報を伝える任務である。

「自分は農家の三男坊で、後を継ぐ兄貴もいるさかい、自分が行く言うて。父ちゃんらしいやろ」

とあきれ顔で言った。

「一緒に行かかった戦友は亡くなったんよ。ここに越してきたときに信頼している人に聞いてほしかったんやろな。その時の話をしたんよ。そしたらその人は何で戦友を助けなかったんやと言わはったんやで。助けられるはずないやん。自分は右手を吹っ飛ばされて血を流してるんや。倒れてる人を抱えて逃げられるはずないやん。それに父ちゃんいうたらな、『自分のことが大事や、人のことなど構てられん』って言うてしもたんや。損な性

格やで。かつとしたかもしれないけど、自分がひどい人間やと言うてるようなもんやないか。それからは戦争のことはもつと誰にも話さんようになってしまおうたわ。なんで嘘でもよう生きて帰ってくれたなあと言うてくれはらへんかったんやろと思うわ」

いつも金銭面で苦労し、生活の場面では常に久男の右腕となって支えていることを大変やとぼやいているよしゑだが、やはり一番の理解者であると秋子は思った。

伝令で一緒に走ったのは、あの新妻の写真を見せた戦友だったのだろうか。写真のことをよしゑは聞いていなかった。秋子は混乱した。あの戦友は誰よりも生きて帰らなければならぬ人である。一日だけの可愛い新妻を残して死ぬはずがない。

「コンバット！」秋子は小学校高学年の時に聞いた父の言葉を思い出した。久男はドラマで上官と部下が仲良くしているのを見るに堪えないと言った。これは秋子の想像に過ぎないが、戦友にとって部隊は辛いところだったのか。川口君が行くなら自分も行くと言乗ったのか。久男は止めたはずだ。でも行くことになった。誰よりも生きて帰さなければならぬ戦友を救えなかった。自分を責め続ける人生になったのだろうか。自分だけが生きながらえていいのかと問うた一生だったの

か。もうあかんとはどんなことがあったのだろう。娘に恵まれた久男は娘のために生きようと決心したのだろうか。

秋子が高校生の頃、新しい家に移ってすぐに中古ではあったが大きな仏壇を久男は購入した。秋子はどうしてこんな物に大金を支払うのか理解に苦しんだ。反抗すると久男とよしゑは必要な物だと言い切った。その後、久男はその仏壇を大事にした。毎日夕刻になると「正信偈」という少し長いお経を上げるようになった。線香も沈香もたつぷりと使った。

あれは単にご先祖や両親のためだけでなく、戦友のことも思つてのことだったのだろうか。その後、よしゑも亡くなり、三回忌を済ませると秋子は重い腰を上げて二人の遺品を整理に取りかかった。久男の気に入りの部屋を物置同然にしていたが、多くの物を処分し、掃除をして床の間には掛け軸をかけ、花台の上には香炉を飾った。高価な物ではないが、うれしそうに秋子に見せていたもので、どれも処分する気にはなれない。他にも花瓶や香炉を納めた戸棚を整理したときのことであつた。棚の上段の奥にひときわ黒く変色した細長い桐の箱を見つけた。脚立に乗って取り出すと軽い。空箱かと思つて部屋の真ん中に下ろして見ると楷書で箱書きがあつた。

「御下賜品」初めて見るものであった。こんな言葉を使って品物を下さるのは今の日本で天皇陛下しか思いつかない。しっかりと桐の箱でおそらく白かったであろう紐を解く。それは空では無かった。八十年以上経っているのに、シミも虫食いもない白い紙の筒に、

「御下賜繙帯」と書かれている。箱書きと同じ楷書だ。紙筒の底に一巻きだけ包帯が残っている。包帯を包んでいるセロファンは茶色に変色している。よく見ると紙筒の上下に赤いシールがあり「宮内省皇后宮職」とある。皇后陛下から賜ったものだ。部屋に飾る物ではなく、久男の身体を労るものだったのだ。

後日、本棚から送り状も出てきた。昭和十五年の日付があった。義眼や義肢を必要とするようになった者に皇后陛下が送って下さった物だ。NHKのドキュメントで明治皇后が始められたと放送されていた物と同じだった。

秋子は思った。久男が素朴な掛け軸を初めて手に入れたとき、小学生の娘相手に漢詩の一節であるような文字を満面の笑みを浮かべて何度も読んで聞かせた。

しかし木箱に入った包帯を見せることは一度もなかった。大正生まれの久男なら、自分はお国のために戦争に行き、こんな身体になつて苦労したけれど、皇后様から労つてい

ただいたのだと自慢しても良さそうなものだ。少なくとも娘にだけは。

しかし、わずか五巻ほどの包帯が入っていたようだが、一巻は使わずに残している。これは亡くなった戦友への精一杯のお詫びだったのだろうか。包帯で労われることのない深い心の傷を負って生きてきたのだろう。

秋子は遺影に向かつて父に語りかけた。

「父ちゃんの気の弱いところ、心優しいところも、生き方が下手なところも、悔しい思いをしてきたことも母ちゃんと私は分かっている。だけどそれだけで終わったらあかんと思う。

この包帯は県平和祈念館に寄贈して若い人に見てもらおう。戦争を起こさない人に育つてもらうために。私は戦争の惨さを伝えることを考える。今の時代、またきな臭くなってきた。私に何が出来るか分からないけれど、一生懸命やってみるから見てや。」

父親に誓うものの秋子は自分の非力は分かっていた。悔しくてひとしきり涙をこぼした。

それから四ヶ月後、二十年以上花の咲かなかった小さな東洋蘭に針金のような細い花芽が出てきた。

久男は花の手入れが好きで、たくさんの花の鉢を残していた。秋子は仕事や介護が忙しく、難しい花は枯らしてしまっただけれど、君

子蘭やシンビジュームは水やりをして、冬場は広縁に並べて取り入れただけで、春になると大きな花を咲かせた。細い鉢に植えられた一鉢の金稜辺という春蘭の仲間の花は久男が認知症になってから咲くことはなかった。四月になると細い花芽にえんじ色の小さな花が十輪咲いた。秋子は久男に気持ちが届いたのだろうかと思つた。

久男が亡くなって八年経つた平成二十五年十一月に日本傷痍軍人会および日本傷痍軍人妻の会が会員の高齢化と会員数の減少により解散された。タンスの小引き出しには秋子が処分しなかった久男とよしゑの古い記章が残されている。

これで戦後が一区切り付いたと言う人もいたが、忘れてはならないのだと秋子は思った。社会の片隅で六十年以上も自分を責め続けた一歩兵が全国には他にもいたのではないか。知らないだけで、なかつたことにはいけないのだ。

「今度また、父ちゃんが金稜辺を咲かしてくるように頑張るね」

と秋子はパソコンに向かった。今年も君子蘭の大きな白い花芽が何本も出てきた。

(評)

戦争テーマ素材の宝庫だが、欲張りすぎてや  
やまとまりを欠いたか。母や秋子の部分は割愛  
し、父に焦点を絞る方がよかった。細かいこと  
だが、秋子が預けられ先の娘らに言われた「い  
んで」にはリアリティがあつていい。

佳  
作

## その棘すら抱き締めて

近江八幡市

中尾 友 貴



### 《総評》

入選作について補足。「父」は盛りだくさ  
んだ。傷痍軍人として屈辱の日々。戦友を救  
えなかつた罪悪感。「コンバット」を忌避す  
る理由。最後に満を持して御下賜品の桐の箱  
の登場。どれ一つとっても小説一本書ける素  
材。残念なのは、これらがつながらず「羅  
列」で終わっていること。

もう一つ気になるのは最後の場面。父の思  
いを象徴するのは、桐の箱に入った繻帯かと  
思いきや、あれれ、一鉢の金陵辺だったの  
か。小説の着地が二三歩ずれている。作者に  
書きたいことがありすぎて欲張った結果がこ  
うなつたか。語りすぎてはいけないのだ。

小説に限らず文学において大切なことは  
「説明」ではなく「描写」だ。詳細かつ丁寧  
に描写することでリアリティが生まれ、リア  
リティにより小説は「物語」から進化する。  
今回惜しくも佳作となつたもう一つの作品  
は、欲張らずバラの花一本で十二枚書き上げ  
た力作だが、「バラは枯れていなかつた！」  
で終わるありがちな話。ステレオタイプは避  
けるべし。独創的な表現、先の読めない展開  
こそが小説の媚薬です。

井 上 次 雄

